

子どもに漢字教育をするという、つい勘違いしがちなことは、「漢字で教える」ということと「漢字を教える」ということがまったく別なのだということに気づかないで、あくまでも教え込んでしまっているということです。

私は「漢字で」と「漢字を」ということを厳密に区別しているのですが、漢字教育という、どうしても「漢字を」教えてしまうケースが多いのです。しかも、悪いことに、子どもがどれくらいわかったかを“書かせる”ことによってチェックしてしまいがちなのです。

しかし、漢字を覚えさせることが目的となったり、書かせたりすることはまったく無意味です。鉛筆もまだろくに持てない幼児に「旗」などという字を書かせることには無理があります。無理なことは苦痛になりますから、結局、身につかないのです。それどころか、無理に漢字を教えるから漢字嫌いになってしまうのです。

私が提唱している石井式漢字教育では、次の三つを基本理念としています。

- 一、漢字を教えるはいけない
- 一、漢字をどれだけ覚えたか、テストをしてはいけない
- 一、漢字を書かせてはいけない

漢字教育をする場合、子どもに漢字を書かせる必要はまったくありません。ないどころか、漢字を書く能力は幼児の才能開発にとって何の

プラスにもなりません。小学校に入ってからでも、漢字を書き取る能力はほとんど必要ないのです。

極端なことを言うようですが、小学校に入って、もし書き取りの試験で悪い点を取ってきても、叱る必要はまったくありません。むろん、わざわざ漢字で零点をとってきた子どもの頭をなでてやる必要はありませんが、叱ったり、復習させる必要はないということです。

漢字のテストでいい点を取ることと、子どもの脳を活性化させることとは少しも関係ありません。漢字は読めさえすればいいのです。漢字が読めるようになると、親が放っておいても本を読むようになります。そうすると、幼児の脳は活発に動き始めるのです。

現に、私は息子が小学生になって書き取りの宿題を出されて帰ってきて、息子には一切やらせませんでした。書き取りをやって、それができるようになったからといって頭がよくなるはずがないと確信していたからです。

一時間も二時間もかけて漢字の書き取りをさせるくらいなら、本を読ませたほうがはるかにいいのです。今だから言えることですが、息子の代わりに、私が宿題の書き取りをしたこともあるほどです。わざと子どもの字を真似てへたに書いてやったものです。そこまでしなくても……と思われるかもしれませんが、それほど、子どもにとって漢字を書かせることは無意味だと考えていたからです。